

(出水市下鯖洲沖田岩戸)

### 位置と環境

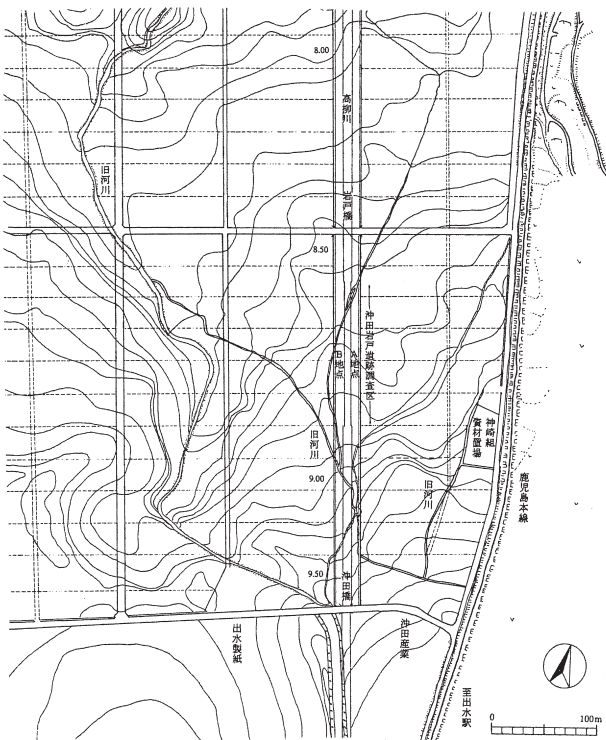
沖田岩戸遺跡は、八代海に注ぐ米ノ津川によって形成された南九州では典型的な扇状地地形を成す出水平野の東部を、ほぼ南北に流れる高柳川中流域に位置している。

本遺跡は、平成11・12年（1999・2000）に県教育委員会が九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って調査を実施した大坪遺跡などと相接している。

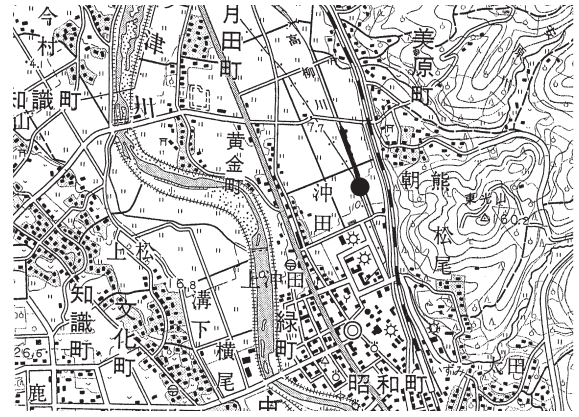
### 調査の経緯

鹿児島県土木部出土木事務所は、昭和48年（1973）度の事業として高柳川河川改修工事を発注し施行したが、河川の掘削中、縄文時代晩期の遺物が発見された。

調査は昭和48年10月1日から49年1月31日の間に出水市教育委員会、昭和49年2月1日から3月31日の間は、石器文化研究会（代表池水寛治）によって実施された。調査の対象面積は、約945㎡であった。



第2図 沖田岩戸遺跡の周辺地形



第1図 沖田岩戸遺跡の位置

### 遺構と遺物

本遺跡は、縄文時代晩期の遺跡として縄文農耕の存在の有無を知るものと期待しての調査であったが、沖積低地特有の粘質土壌と幾多の氾濫を受けたのか脆く剥落や磨滅を受けた土器破片が多かった。

遺構の検出はなかったが、遺物は概ね層位毎に出土したものの礫などと混在した状況であった。

出土遺物は、遺跡の北側で幅約6m、長さ約100mの弧状に集中して出土した。

土器では、縄文時代中期の並木式土器、縄文時代後期初頭の南福寺式土器をはじめ、出水式土器、西平式土器、松山式土器もごくわずかに出土している。

縄文時代晩期は、本遺跡の主体をなす時期の遺物が大半で、黒川式土器や入佐式土器を中心に出土した。鉢形土器には、その形態から大型土器・中型土器に分類され、大型土器では口縁部に平行沈線文を施すものが主体であるが、ほかに山形沈線文、貝殻条痕を施すものも多く出土し、これらの中には組製土器や精製土器もみられた。

浅鉢形土器も深鉢形土器と同様に黒川式該当のほか入佐式該当の土器を中心に、把手を付着したのも出土し、いずれも黒色研磨土器が主体をなしている。そのほか、器面に波状沈線文を施したマリ等が出土し、バラエティーに富んだセット関係は注目されている。

一方、縄文晩期の黒川期や入佐期該当の土器とともに多種多様の石器がみられる。特に、黒曜石を中心に夥しい剥片なども出土している。

石器には、定形石器と小型剥片石器に大別でき、

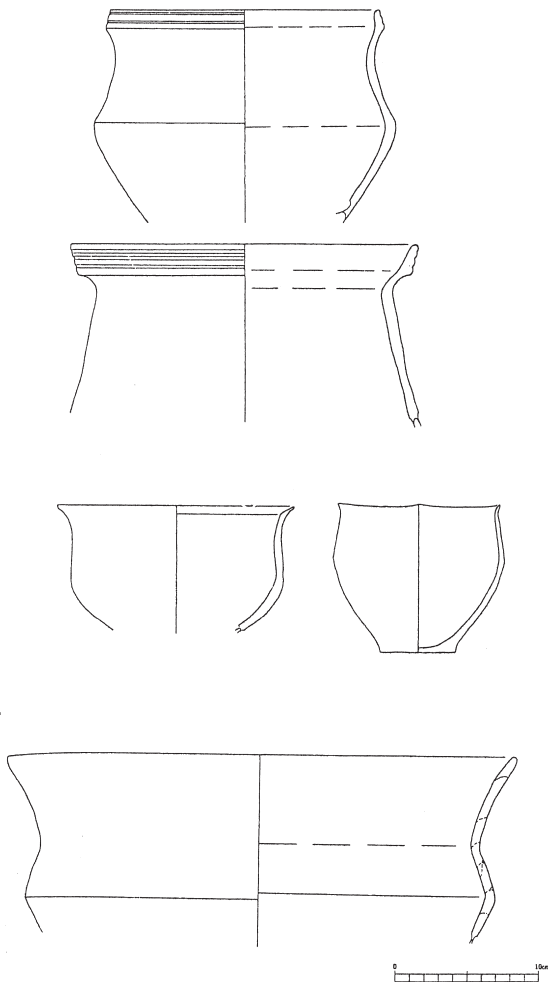
定形石器には、磨製石斧（乳房状・定角状・局部磨製石斧・ノミ状），打製石斧（短冊状・有肩状），打製石器（横刃型・円盤状），異形石器，礫石器類，磨石，凹石，敲石，石皿，大型棒状石器（磨石状・凹石状・石皿状）などがあり，安山岩・砂岩・蛇紋岩・頁岩・粘板岩など多くの素材を利用している。

小型剥片石器には，石鏃，尖頭状石器，石匙，石錐スクレイパーにおいて黒色安山岩・チャートを用いているが，全般的には黒曜石を多く用い，素材から遠隔地石材への依存度を知り得るものである。

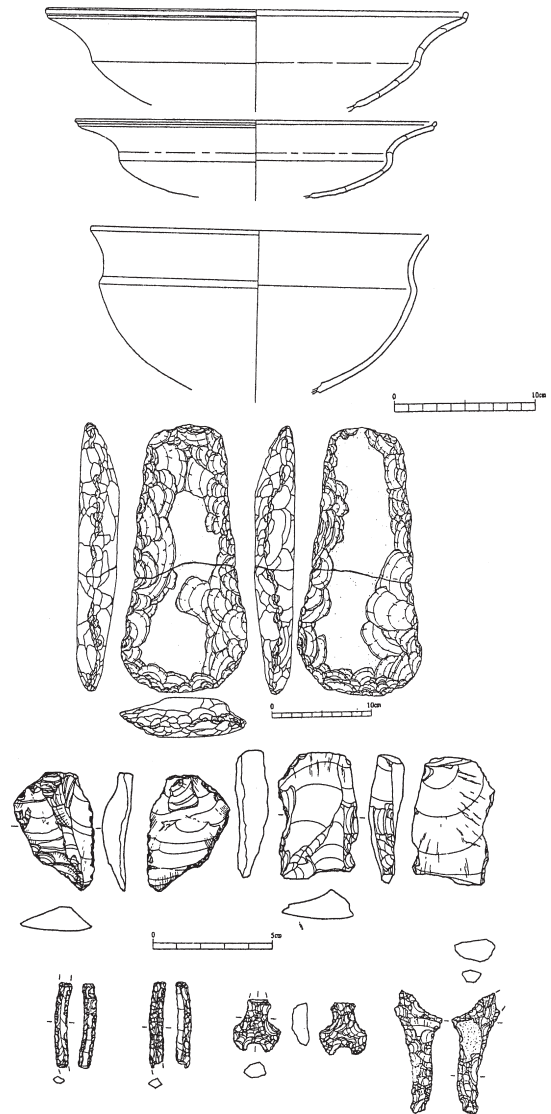
また，ドリル，石核のほか，主に剥片の測片を使用する刃器とみられる剥片石器なども出土している。

石製品には，蛇紋岩を素材にした管玉・小玉がみられ，両方から穿孔を認められる。

そのほかの遺物には，成川式土器の高坏形土器や甕形土器，須恵器の壺の完形品，土師器，石鍋なども出土している。



第3図 沖田岩戸遺跡の出土遺物



第4図 沖田岩戸遺跡の出土遺物

### 特徴

本遺跡は，高柳川によって区分された状況で，縄文晩期の遺跡として，その沖積低地という立地とともに，調査当時は，縄文農耕の存在の有無を知る手がかりをくれるものと期待しての調査であった。

遺物の中で石器には，縄文時代晩期の農耕栽培などの問題を考えるうえで貴重な資料を得ている。

### 資料の所在

出土遺物は，出水市教育委員会に保管されている。

### 参考文献

鹿児島県教育委員会1998「沖田岩戸遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』26

(立神次郎)